The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	韓国語の文字と発音の授業デザイン
Author(s)	秦, 秀美
Citation	外国語教育のフロンティア. 2020, 3, p. 171-182
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75633
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

韓国語の文字と発音の授業デザイン

A Course Design of Korean Beginners' Literacy Development for Japanese KFL Learners

秦　秀美

要約

日本における韓国語の授業において、最初に文字と発音を教えるのに多くの時間をさかなければならず、少しずつ文字と発音を覚えていく過程の楽しさをどのように体験させるのかが、重要な課題と言える。学習に大変さを感じるのは、覚える文字の量の多さや発音の難しさなど、日本語との相違点のみが原因とは言えない。授業時間内の到達目標の範囲が広すぎたり、学習した内容が達成感につながることなく次の学習に進んだりするなど、授業デザインの問題に起因する場合もある。本稿は、日本語母語話者を対象とした韓国語の文字と発音の指導について、教育現場と結びついた授業デザインの観点から考える。具体的には、学びやすい学習内容の順序立てと各学習段階で無理なく学習できる到達目標の範囲を設定し、学習段階ごとに会話練習や到達目標への達成度を確認する様々な活動を組み入れ、学習者が取り組みやすい授業デザインの一案を示す。特に文字と発音の学習段階では、教科書に書いてあることを教えるだけの授業構成は取らず、学習内容の理解のための教師主導の指導部分と、学習者の活動量を増やしたアウトプット活動部分を組み合わせて、学習者のやる気を引き出せるように授業をデザインし、メリハリのある授業運営を心掛ける必要がある。

キーワード：韓国語教育、韓国語の文字と発音、韓国語学習者、授業デザイン、活動

1. はじめに

日本の大学で韓国語を学ぶ学習者の多くは、専攻語としてではなく第二外国語として週1コマ（または週2コマ）の授業で学んでおり、最初に文字と発音を集中的に全部学習してから、本格的に文を作るための文法や文型の学習に入るのが一般的と言える。韓国語は母音字21個と子音字19個があり、その母音字と子音字を音節単位に組み合わせて綴られるため、文字を一つずつ覚えるだけでは不十分で、組み合わせて字を作る仕組みを理解する必要がある。初級教科書はたいていの場合、最初の第1課～第5課ぐらいにおいて、文字と発音の学習内容が提示されており、文字と発音が導入された後、練習問題に書いてある韓国語の単語を発音しながら書いてみるパターンの確認作業や聞き取りの練習問題が

多く取り入れられている。週1コマの授業であれば、少なくとも一ヶ月以上を、このような過程を通して文字と発音を学習していくことになるが、まだ学習者が文字と発音に慣れていない段階で馴染みのない単語の読み書きの練習が続くと、文字と発音を覚える作業に退屈さを感じてしまうかもしれない。文字と発音の学習は、その後の学習の動機づけに影響を与える重要な意味を持つだけに、教科書を使いながら、授業内容の構成に変化を持たせて、学習者のやる気を引き出せるように授業をデザインしなければならない。

先行研究は文字と発音そのものの指導上の問題点を考察したものが多く（趙2007、梁2008）、具体的な授業デザインを示したものは見当たらない。文字と発音の学習に飽きることなく、スムーズに取り組んでもらえるためには、的確な説明による指導法だけでは不十分で、学習者が取り組みやすい授業をデザインして運営に臨む必要がある。

本稿では、筆者担当の本学の兼修語学という科目の事例を取り上げ、学習者が取り組みやすい文字と発音の授業デザイン（前期15回分の授業中、最初5回分）について述べる。具体的には、学びやすい学習内容の順序立てと各学習段階の到達目標の範囲設定、そして授業の構成に組み入れた会話練習や到達目標への達成度を確認する様々な活動の詳細について見ていく。紙幅の都合により、ここで取り上げるのは学習した内容を活かしたアウトプット活動が中心であり、文字と発音そのものの指導法や学習内容の理解を促進するためのインプット活動の詳細については割愛する。

授業運営は担当教員一人一人に委ねられており、様々なバリエーションがあると考えられるが、運営をよりよいものとするための文字と発音の授業デザインの一案を示すことが本稿の目的である。

2. 学習内容の順序立てと各学習段階おける到達目標の設定

本学の兼修語学という科目は初級から上級まで週1コマが設けられており、筆者担当の初級クラスは受講者32名で（2018年度）、『ことばの架け橋（改訂版）』[1] という教科書を使用した。全部で21課の構成で、1 ～ 3課までが文字と発音の学習となっている。週2コマの授業で使用して1年で終えることを想定している教科書であるが、週1コマの授業では中級まで引き続き使用することが可能であり、兼修語学初級ⅠとⅡを合わせて1年で12課まで進むことを目標とする。本稿では、1 ～ 3課までの文字と発音の授業だけを取り上げるが、教科書の導入の順番は次のとおりである。

第1課：「ㅏ, ㅓ, ㅗ, ㅜ, ㅡ, ㅣ, ㅐ, ㅔ」→「ㅑ, ㅕ, ㅛ, ㅠ, ㅖ, ㅒ」→「ㄴ, ㄹ, ㅁ, ㅅ, ㅎ」
第2課:「ㄱ, ㄷ, ㅂ, ㅈ」→「ㅋ, ㅌ, ㅍ, ㅊ」→「ㄲ, ㄸ, ㅃ, ㅆ, ㅉ」→「ㅘ, ㅙ, ㅝ, ㅞ, ㅢ, ㅟ, ㅢ」
第3課：終声「ㄴ, ㄹ, ㅁ, ㅇ」→ 終声「ㄱ, ㄷ, ㅂ」→「連音化」

このような導入の順番は趙（2007）で考察された「学習者の母語である日本語を活用した教授法としての母音と子音の学習順序」と概ね共通している。韓国語の母音と子音の導入の順番は教科書によってばらつきが見られており、母音の場合、基本母音字に沿った「아,야,어,여,오,요,우,유,으,이」という導入の順番も多く取り入れられている。が、これは韓国語母語話者が覚える母音順であって、外国語として韓国語を学ぶ場合の導入の順番として必ずしも効果的とは言えない。先行研究（趙2007、川越2015）で指摘されているように、基本母音字には単母音と半母音が混ざっており、基本母音字10個を学習してから単母音「에,애」を含む合成母音字11個を導入する字形による区別は、発音の仕方の区別による導入の順番に比べて、理解が不十分なまま丸暗記に移ってしまい、学習に負担が生じる恐れがある。そのため、まず単母音字8個をしっかり学習して、基となる単母音字から残りの母音字の増やし方を理解してもらう導入の順番の方が学習者にとっては理解しやすいと考える。

そして、子音の場合は、①上記の教科書のように日本語母語話者にとって容易に発音が可能な子音から導入する方法、②音声学の観点から調音法によって鼻音、平音、激音、濃音、流音にグループ分けし、導入する方法、③日本語の五十音順の「あかさたな…」のように、韓国語の子音字順の「가나다라마…」に沿って導入する方法がある。

②の方法は、基礎的な音声学や音韻論の知識がある上での導入時に役に立つと考えられる。それは、調音法による平音のグループは「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅅ,ㅈ」であり、「ㅅ」が含まれるため、「ㅅ」も同じグループとして提示しなければならないが、日本語との発音の相違によって学習が難しいとされる子音の中には「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅈ」がある。「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅈ」は語頭では声帯振動を伴わない無声音であるが、「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅈ」の前に母音、鼻音、流音といった有声音が位置すると、その影響により有声音化される。これに対し、「ㅅ」は有声音化しないため、その理由について音声学上の「ㅅ」の特徴をさらに理解しなければならない。

無声音と有声音が音素として対立して意味の区別を担う日本語とは違って、韓国語では無声と有声は弁別素性ではないことを理解し、「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅈ」が無声音と有声音で発音できる仕組みを理解するのは決して簡単ではなく、「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅈ」の有声音化の仕組みが理解できたとしても、それを学習ストラテジーにそのまま用いるわけではない。実際学習者は「語頭では濁らず、語中では濁る」という単純化した学習ストラテジーを用いることが多いと考えられる。学習者が使うストラテジーの観点から考えると、「ㅅ」は有声音化しない上に、日本語のサ行とザ行のような関係を成さないため、「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅈ」と同じグループとして導入すると混乱をきたす恐れがある。「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅈ」のみを一つのグループとして取り上げ、有声音化に焦点を当てて理解を促す必要があると考えられる。

一方で、比較的日本語母語話者が学習しやすいとされる鼻音「ㄴ,ㅁ」、流音「ㄹ」、平

音「ㅅ」、激音「ㅎ」を文字の学習が始まった早い段階で導入することによって、読み書きができたという達成感につながる活動を取り入れやすくなると考える。

以上の理由から、概ね使用教科書の導入順に沿って、文字と発音の授業計画を立てる。本稿での学習目標は「文字の読み書きができるようになること」とし、90分の授業5回分を通して行う（兼修語学初級Ⅰの前期15回分の授業中、三分の一を占める）。学習者は勉強するのが当然だと思い、文字と発音を覚えることを学習者任せにしてしまってはならず、韓国語を初めて習う学習者の気持ちになって、各学習段階の到達目標を無理なく頑張ればできる範囲に設定することが重要と考える。よって、各回の到達目標を表1のように設定した。

表1　各回の到達目標となる文字と発音の範囲

1回目	ㅏ, ㅓ, ㅗ, ㅜ, ㅡ, ㅣ, ㅐ, ㅔ
2回目	ㅑ, ㅕ, ㅛ, ㅠ, ㅖ, ㅒ ／ ㄴ, ㄹ, ㅁ, ㅅ, ㅎ
3回目	終声ㄴ, ㄹ, ㅁ, ㅇ ／ ㄱ, ㄷ, ㅂ, ㅈ
4回目	ㅋ, ㅌ, ㅍ, ㅊ ／ ㄲ, ㄸ, ㅃ, ㅆ, ㅉ
5回目	ㅘ, ㅙ, ㅝ, ㅞ, ㅢ, ㅟ, ㅚ ／ 終声 ／ 連音化

母音の学習はまず単母音字8個を徹底的に学び、単母音字を基にして他の母音字を増やしていく仕方により3回に分けて導入する。一方で、教科書の順番と異なるのは、終声（音節末子音）の「ㄴ, ㄹ, ㅁ, ㅇ」である。表1のとおり、2回目に学習した内容とつなげて3回目の導入となっているが、教科書に沿った本格的な導入ではなく、発音練習中心のプレ学習として取り入れている。日本語の音節は基本的にCV構造で、音節末子音は促音と撥音のみであるのに対して、韓国語は音節末子音の発音に7通りがあり、日本語母語話者にとって難しいと感じられる部分と言える。5回目の授業で教科書の順に沿って正式に扱うことによって、繰り返し学習する効果をねらう。そして、「ㄱ, ㄷ, ㅂ, ㅈ／ㅋ, ㅌ, ㅍ, ㅊ／ㄲ, ㄸ, ㅃ, ㅆ, ㅉ」は最も難解な部分のため、一度に扱わず、まずは「ㄱ, ㄷ, ㅂ, ㅈ」を理解してもらった後、週をまたいで「ㅋ, ㅌ, ㅍ, ㅊ／ㄲ, ㄸ, ㅃ, ㅆ, ㅉ」を導入することで、学習者の理解を深める。

3. 授業の構成と教室活動

文字と発音の導入と練習は基本的に、「文字の提示→発音の導入（読み方）→コーラス練習→（書き順を把握するための）文字の板書→書き取り練習」の順で進行した後、教科書の「文字の読み書き練習、単語の読み書き練習」の順となる。この過程において、学習内容の理解を促進するための指導法を工夫して、丁寧に授業を行うことが最も大切と言えるが、導入と練習の単調な繰り返しによる言語知識の受身の学習になってしまう恐れがあ

る。学習に飽きることなく、意欲的に取り組んでもらうためには、文字と発音の学習段階であっても各回の授業を通して何ができるようになったのかを実感させる活動を組み合わせて、達成感が感じられるように授業を展開することが望ましいと考える。

そこで、教科書に沿って文字と発音の指導をしながらも、教科書に書いてあることを教えるだけの構成はとらず、会話練習や到達目標への達成度を確認する様々な活動を組み合わせて、各学習段階の授業の流れを表2のように構想した。

表2　各回の授業の流れ

1回目	あいさつ（1）の導入と練習 → 初日は親しみやすいように、日本語の母音順に沿って「아,이,우,에,오」を導入、練習 →「애,으,어」の導入と練習 → 母音字8個の達成度確認 → まとめ
2回目	復習 → 母音字8個の達成度確認（小テスト） → 教科書順に沿った既習母音字の並べ替え →「야,여,요,유,예,얘」の導入と練習 → 母音字14個の達成度確認 →「ㄴ」の導入と練習 →「예／네」と「아니요」の導入と練習 →「ㄹ,ㅁ,ㅅ,ㅎ」の導入と練習 → 達成度確認 → まとめ
3回目	復習 → 2回目までに学習した文字の達成度確認（小テスト） → 終声「ㄴ,ㄹ,ㅁ,ㅇ」のプレ導入と練習 →「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅈ」の導入と練習 → あいさつ（2）の導入と練習 → まとめ
4回目	復習 →「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅈ」の復習 →「ㅋ,ㅌ,ㅍ,ㅊ」の導入と練習 → 達成度確認 →「ㄲ,ㄸ,ㅃ,ㅆ,ㅉ」の導入と練習 → ティッシュを使った平音、激音、濃音の発音練習 → 最小対語を用いた発音練習 → まとめ
5回目	復習 →「와,왜,워,웨,외,위,의」の導入 → 終声「ㄴ,ㄹ,ㅁ,ㅇ」の練習 → 終声「ㄱ,ㄷ,ㅂ」の導入と練習 → 達成度確認 → 連音化の説明と練習 → まとめ

以下では、到達目標の学習内容そのものの指導法の詳細については割愛し、それ以外に取り入れた内容と指導手順を中心に見ていく（主に、表2の　　の部分）。

3.1 1回目の授業

1回目の授業は初回に相応しく、教科書8ページのあいさつ(1)の「안녕하세요?／야마다입니다／반갑습니다」を最初に取り入れて、文字は読めなくとも、音で覚えてあいさつ(1)が言えるようにチャレンジする活動から始まる構成を組んでいる。

あいさつ(1)を板書し、「안녕하세요?」とコーラスさせ、発音に慣れてきたことが確認できたところで、教師と学習者、学習者同士であいさつを交わす。次の「야마다입니다」を練習した後、「야마다」の部分を次々と芸能人の名前に変えてコーラスさせるが、芸能人の名前にすることでアイスブレーキング効果をねらう。最後は学習者自身の名前に置き換えて練習する。「반갑습니다」は初日の発音では難しいと考えられるが、正確さよりはフレーズとしての流暢さを目指して音で繰り返してコーラスさせる。

3文を音で覚えたところで、隣同士の学習者、そして前後席の学習者同士で会話のやりとりをする時間を設け、初対面の会話が韓国語でできるようになったことを実感させる。この活動を通して初日の教室の緊張感がほぐれると同時に、板書した文を用いて韓国語の特徴（教科書2-3ページ）を紹介するスムーズな流れを作ることができる。その後、文字の仕組み（教科書4ページ）を説明し、1回目の到達目標の学習内容を導入する流れとなる。

最後の達成度確認では母音字8個の文字カード[2)]を使い、次々と異なる順番で見せて文字と音を一致して覚えているかどうかを確かめる。あいさつ（1）を用いて会話を交わした学習者同士（4 ～ 6名程度）でグループを作り、各グループ順に行った後、最後にクラス全員一斉に行って終える。ドリル形式でテンポよく行うため、読みが遅かったり不確かなグループに対しては途中で止めさせ、後に回してもう一度行わせる。他のグループの確認をしている間、授業時間内にしっかり覚えることを目指す。30人以上の中規模クラスのため、個々人に対する実施は難しいが、全員一斉に行う場合に比べて、できていない学習者の把握が容易である。

3.2 2回目の授業

2回目は前回の既習母音字8個の復習と小テスト実施から始まる構成を組んでいる。既習母音字8個をしっかり覚えておかないと、次の学習に支障をきたしかねないため、一般的に行われる方法で小テストを行い、定着させる。既習母音をそれぞれ教師が2回発音して書き取らせる方法で行う。10問中6問は一文字の問題[3)]で、残りの4問は二文字の問題にする。まだ韓国語の音に慣れていない段階のため、「우」と「으」、「오」と「어」を聴覚だけに頼って書き取るのは難しく、最初は聴覚だけで、その後は教師の口元を見て確認しながら答えを書くように指示する。同じく、教科書の聞き取り練習問題を行う場合においてもCDの音声だけを聞かせることはせず、最後に教師の発音の仕方を見せて確認させる。

「야, 여, 요, 유, 예, 얘」の導入と教科書の練習問題が終わった後は、母音字14個の達成度確認を前回と同じ要領で行う。

「ㄴ」の導入と練習後は、「예／네」と「아니요」を板書して読ませた後、出席を取る時の返事に「예／네」が使われることを説明し、2回目の出席チェックをこのタイミングで行って、「예／네」を言わせる。また、次週からも出席を取る時は「예／네」で答えさせる。

次に、1回目のあいさつ（1）の練習時に導入された「～입니다」を口頭で復習し、「다」を「까?」に変えることで、質問文になることを説明してコーラスさせる。簡単な名詞文の質問と答えの練習にチェレンジさせるためである。「～입니까?」の発音に慣れてきたところで、「요코하마입니까?」とコーラスさせた後、「요코하마」の部分を他の日本の地名に置き換えて全員一斉に繰り返し練習する。次に、音で「집이」を加えて「집이 요코

하마입니까?」とコーラスさせ、意味を教える。そして、「집이（地名）입니까?」の質問とそれに対する答えの「예／네,（地名）입니다」または「아니요,（地名）입니다」をペアで練習させる。さらに、1回目のあいさつ（1）に今回の部分を組み合わせることで、初対面の会話を発展させて練習することができる。このように、学習した内容と関連性があり、身近にあって繰り返し使える表現を活動と結びつけて練習し、使える表現を少しずつ増やしていく。

最後の達成度確認では、2回目までに習った文字を用いて、韓国語で表記した日本語のことばを板書し（例えば、「나노하나／미소시루／호호에미」など）、読めるかどうかをまず学習者同士で確認させ、最後に全員で確認する。読むことで日本語の意味がわかるため、読めたという達成感が得られやすい。

3.3 3回目の授業

3回目は母音字14個と「ㄴ,ㄹ,ㅁ,ㅅ,ㅎ」を復習した後、小テストに大幅な時間を割く。小テストの内容に関しては、2回目の最後に達成度確認の内容とつなげて簡単に説明しておき、次のような手順で学習者一人一人に小テスト問題を作成させ、実施に臨む。

①2回目の最後の達成度確認に板書したのと同じように、韓国語で表記した日本語の「아메／나노하나／미소시루／스시」などを例示し、日本語音の韓国語表記法に関する注意点を以下の3点に絞って簡単に説明する（長音の表記に関しては、この段階では説明せず、文字通りに表記させる）。

・日本語の「お」は「오」を用いて表記し、日本語音にない「어」を用いないこと

・「う」は「우」で表記し、「누,루,무,후」にも「ㅜ」を用いて表記すること
　ただし、「す」に関しては「ㅡ」を用いた「스」で表記すること

・「え」は「에」を用いて表記すること

②表記に使う日本語のことばは、2回目までに習った母音すべてと子音5つ（「ㄴ,ㄹ,ㅁ,ㅅ,ㅎ」）を使った3文字以上のものとし、全部で7個をそれぞれ自由に考えさせる。

③小テスト用のミニッツペーパーを配り、縦に1～7番まで番号を振って、自由に選んだ7個のことばを韓国語の文字のみで表記させる。また、他の学習者が受ける小テストの問題紙になることを念頭に入れ、丁寧な作成を心掛けるように促す。学習者が問題を作っている間は教室を回ってわからない部分について質疑を受け、問題作成が終わったところで、一番下に出題者の名前を書くように指示する。

④問題を作る段階では教科書やノートを参考にしてもいいが、問題紙を回収し、小テスト実施にあたっては参照を一切認めない一般的なテスト形式にする。

⑤答案者に問題紙を配り、上段の氏名欄に名前を書くように指示する。読めたら日本語の

どのことばにあたるのかがわかるため、答えは漢字でもカナカナでも表記可能とする。

⑥8 ～ 10番は教師が用意した問題（例えば、「ハヤシライス」「嵐山」「メモ用紙」など）を韓国語で表記させる。

⑦答案が終わったところで回収した後、作成者に戻して採点をさせ、10点満点中何点なのかを記入させる。

⑧採点後は教室内を自由に移動させ、作成者と答案者が、問題と答案の間違った部分について話し合いをする時間を設ける。（答案だけでなく、問題にミスがあった可能性もあるため、互いに確認をする）

⑨一連の活動が終わったところで、問題紙を回収する。

このような問題と答案作成の活動を通して、2回目までに学習した内容をどれくらい理解できたかを確認し、読み書きの定着を図る。また、日本語音の韓国語表記の大まかなイメージができて、駅名を表示した看板などに書かれている韓国語が部分的に理解できる。ほとんどの教科書の構成では文字と発音の学習が終わったところで、仮名と韓国語の文字の対応表が掲載されており、自分の名前や地名などを表記する練習が設けられているが、日本語の固有名詞の韓国語表記はそれほど簡単ではない。前もって練習しておくことで、注意点が増える詳細な表記の学習にスムーズに取り組むことができると考える。

次に、2回目までに学習した文字とつなげて終声「ㄴ,ㄹ,ㅁ,ㅇ」を導入するが、教科書による本格的な導入ではなく、前回までに習った文字を用いたプレ学習とする。7通りの発音のある終声を一度に導入せず、学習を繰り返すことによって理解を深めるねらいがある。終声「ㄴ,ㅁ,ㅇ」は日本語母語話者にとって同じ一つの撥音だと考えられており、区別が難しく感じられる部分のため、ここでは主にこの3つの発音を練習する。発音練習後は「선생님」を板書し、読ませる。また、単語として読むときと呼ぶときの違いを聞かせ、授業中質問がある時は「선생님！」と呼ぶことができるように練習させる。

「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅈ」の導入と練習後は、教科書17ページの「안녕히 계세요／안녕히 가세요」を導入し、使い分けができるように状況設定を明確にした上で練習に入る。授業の最後には「今日はこの教室で用事があるから、私は教室に残ります。皆さん、先に帰ってくださいね」と具体的な状況を説明し、教室を出ていく学習者一人一人と「안녕히 계세요／안녕히 가세요」のやりとりをする。

3.4 4回目の授業

4回目は「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅈ」の復習や「ㅋ,ㅌ,ㅍ,ㅊ」の導入と練習後、濃音の学習に入る前に、グループ活動を行う構成となっている。「ㅋ,ㅌ,ㅍ,ㅊ」まで学習が終わると、読める文字が一段と増えるが、特に外来語はある程度読めるようになる。グループ活動は、10

個程度板書してある（もしくはフラッシュカードを用意して貼る）外来語を、3、4名の学習者同士で読み、日本語のどのカタカナ語に該当するのかを当てる内容である。提示する外来語は日常で良く使われるものを選び、該当する日本語に「ー」（たとえば、「ニュース」）が入っているものも2、3個入れる。例えば、次のような単語である。

크레디트카드／스포츠／스노보드／피겨스케이트／아르바이트／뉴스
스트레스／피자／바나나／아이스크림／레스토랑／버블티（타피오카밀크티）

個人的に読ませるだけだと、読めたとしても一人では声を出して読むことに抵抗を感じ、消極的になりがちである。これに対し、グループで行う場合は、声を出して読むことに積極的になる傾向があり、仮に読みを間違えたとしても学習者間で訂正が行われるため、読む活動に取り掛かりやすいと思われる。また、カタカナ語を予想するクイズ形式が加わっていることから、楽しみながら活動に参加することができる。

グループ活動が終わったところで、グループごとに板書してある外来語を一つずつ当て、文字と音が一致しているのかを確認し、それに該当する日本語も確認する。最後に教師がもう一度発音を聞かせ、コーラスさせる。

読み終わった後は、日本語と韓国語の違いについて気付いたことをグループで話し合う時間を設け、その後発表させる。

この活動は日本語のタ行とダ行に影響されて読み間違いやすい「드,디,트,티」の読み方を定着させると同時に、のばす音の違いなどを自分で発見させるねらいがある。また、声を出して読むことにより、日本語の意味が予想しやすいため、単に外来語が読めただけでなく、単語として記憶にとどまりやすいと考えられる。

活動の最後は「아르바이트」という外来語が若い人の間では「알바」と縮約されて使われることを紹介し、日常に使われる「케바케／디카」などを板書して、縮約前の外来語を当てるクイズを出す。また、該当するカタカナ語の文字数などをヒントとして提示する。少し難易度は高くなるが、グループでの話し合いが活発になり、最終的には日本語と韓国語の縮約の仕方の違いを学ぶことができる。

一方で、前回の学習内容「ㄱ,ㄷ,ㅂ,ㅈ」とつなげて「피자」の「자」と「바나나」の「바」の発音を例に取り、日本語を学ぶ韓国語母語話者の発音の学習困難点について紹介し、外国語を学習する際の母語の影響について理解を深める授業内容を展開することもできる。

3.5 5回目の授業

5回目は最小対語（「카피,커피,코피」、「비다,피다,삐다」、「가지,가치,까치」）を使った復習から始まり、終声の導入と練習で文字と発音の学習が終わる。

連音化の説明に入る前に、4回目と同じく声を出して　読むだけで意味が予想しやすいことばを用いてグループ活動を行う。5回目は漢字ことばを対象とするが、中でも同じ漢字が使われていて、読みも日本語と似ている以下のようなことばを選ぶ。読むだけで書いてある意味が予想できるのであれば、読んでみたくなる学習意欲も高まるからである。

고속도로／가족／무리／약속／삼각관계／야구／교과서／시민／간단／도서관／관심

고속도로は「高速道路」が正解だが、「こそどろ」と答えを出し合う場合もあって、「こそどろに漢字あったっけ？」という面白い展開となり、共に笑えるきっかけにもなる。

連音化の学習後は、教科書の練習問題から「일요일」、「있어요」を取り出し、上記の「약속」という単語と組み合わせて、「일요일에 약속이 있어요?」という文レベルの連音化練習をする。まずは連音化に注意し、発音ができたところを確認してから、学習者同士で質問して答える練習をする。

文字の学習が完了し、どの文字を見ても読めるようになったとは言え、スムーズに読めるようになるにはもう少し時間がかかる段階と言える。ここで流暢さが求められる早口ことばゲームや歌詞などの文を読む練習を取り入れても、読めたという達成感にはつながりにくく、却って読む作業の大変さだけが実感として残ってしまう恐れがある。この段階では、日本語を予想しやすいことばを用いて、文字を読むだけなのに韓国語で書いてあることがわかったという体験をより充実させることによって、文字学習そのものに興味を持たせ、読みたいと思う気持ちを起こさせることが重要と考える。

4. おわりに

以上、韓国語の文字と発音を覚えていく過程の楽しさをどのように体験させるのかを重視した授業デザインの一案を示した。言語知識を習得する面での全体的な計画においては、「日本語母語話者にとって学びやすい学習内容の順序立て」と「各授業時間内に無理なく学習できる到達目標の範囲」を学習者目線で考慮して設定した。

授業の構成では、学習内容の理解のための教師主導の指導部分と、学習した内容を活かした活動部分を組み合わせて、学習内容と活動の関連性を明示的に示し、何ができるようになったのかを実感させるアウトプット活動を積極的に組み入れた。授業の1回目は、文字は読めなくとも、初対面の会話のやりとりができたという体験から始まり、文字の学習が進むにつれて、各段階で学習した文字を読むだけで、韓国語で書いてあることがわかるという活動を取り入れ、読むことに積極的になれるように仕向けた。文字と発音の学習段階では、文字が読めるようになったという達成感を感じてもらうことが次の学習の動機づけにつながる重要な役割を果たすため、文字を読むだけで日本語の意味が予想しやすいこ

とばを用いた活動はより効果的と考える。また、ペア練習やグループ活動にすることで、互いの不足している部分を教え合うことができると同時に、学習者相互の関係が構築されることが期待できる。よって、学習者の心理的な負担を減らし、授業参加に取り組む意欲を高めることができると考えられる。

受講生からは良かった点について、「きっちり理解しながら授業を受けることができた」、「進度、難易度もちょうどよくてわかりやすかった」、「皆の進み具合に合わせてくれた」、「発音の仕方がわかりやすかった」、「隣の人と質問し合う時間もあったので楽しく受けられた」などの感想を得ることができた。ただし、本稿で取り上げられなかった「文字と発音そのものの指導法」や「到達目標の学習内容の理解を促進するための活動」などを含めた文字と発音の授業全体に対する総合的な感想のため、割愛した部分の詳細について稿を改める必要がある。

注

1) 生越直樹・曺喜澈（2000）『ことばの架け橋（改訂版）』白帝社

2) 基本的に、母音字21個と子音字19個（가,까,나,다,따,라,마,바,빠,사,싸,하,자,짜,차,카,타,파,하）の教科書の活字の字形で書かれた文字カードを用意し（一枚当たり15cm程度の正方形、パソコンで作成）、文字の導入時と順番を変えて読む練習時に使っている。また、韓国語は教科書の活字と手書きに違いがあり、活字のように書くのがくせになってしまわないように注意させる必要があるため、導入時に見せる文字カードの字形と、板書した手書きの字形の違いを比較させる時も便利に使える。

3)「아,어,오,우,으,이」の6問である。現在の若い韓国語母語話者の中で「애」と「에」を区別する人は皆無に近く、コミュニケーション上に障害が生じることはないため、非母語話者にわざわざ異なる発音として練習させる意味はないと考える。昔は違いがあったことを教師の発音で簡単に説明するにとどめ、「에」と「애」は表記の仕方が違うために存在していることを説明する。したがって、「에」と「애」は発音の区別をせず、/e/に当たる韓国語の文字を二つ書かせる二文字の問題として出題する。

参考文献

川越　菜穂子

2015　「韓国語の「文字と発音」導入の問題について-日本語母語話者のための韓国語教科書の分析を通して」『帝塚山学院大学研究論集』50、1-37

国際交流基金

2009　『日本語教授法シリーズ音声を教える』ひつじ書房、東京

2011　『日本語教授法シリーズ文字・語彙を教える』ひつじ書房、東京

趙　義成

2007　「文字と発音の指導法」野間秀樹編『韓国語教育論講座』1、くろしお出版、371-386

梁　炫玉
2008　「日本語を母語とする韓国語学習者のための韓国語の発音教育－入門期学習者のための母音・子音の発音教育に関して－」『大阪経大論集』59（2）、45-64
곽지영・김미옥・김제열・손성희・전나영・정희정・조현선・한상미・한송화・황인교
2007　『한국어 교수법의 실제』연세대학교출판부
한재영・박지영・현윤호・권순희・박기영・이선웅
2005　『한국어 교수법』태학사
허용・김선정
2006　『외국어로서의 한국어 발음교육론』박이정